

烏谷 知子 提出 学位申請論文

『上代文学の伝承と表現』 審査報告

論文の内容の要旨

本論文は、『古事記』を中心に、上代文学成立の背景にある死生観や葬送儀礼などの問題、及び文学性の問題について考察したものである。

第一部第一章では、葬送儀礼の神話を取り上げている。第一節の黄泉国訪問神話において、黄泉比良坂で伊耶那岐命と伊耶那美命が葦原中国の生と死を司る神へと変質するのは、神話形成に陰陽五行思想や道教思想が取り入れられ、二神に北斗七星が有する生と死を司る性格が受け継がれるように構成されたためと考えた。第二節では天若日子神話を取り上げ、この神話が殯宮儀礼と葬送、及び新嘗祭と即位式が分化していく過程を反映したものであると考察した。第二章は、天照大御神と須佐之男命について論じたものである。須佐之男は高天

原と葦原中国とを往還し、次いで根之堅州国へと移動し、異なる世界の空間的位置関係と版図を確定する。風神・雷神・穀物神としての伝承基盤をもち、天照と対立し融合することで神話を展開させるのが須佐之男命である。一方天照大御神は須佐之男命との誓約によって皇統を継ぐ天忍穗耳命を儲ける。国譲り神話では天照は司令神となり、高御産巢日神とペアになる。成長する天照の転換点となる石屋戸神話には「天の原」の語が一箇所記される。これは天照と高御産巢日の常世の神としての原性格を表す語だと思われる。

第三章では、木花之佐久夜毘売神話を論じた。この神話には送り返される石長比売に「甚凶醜」の形容がなされる。醜の拒否と美の選択の要素は垂仁記の円野比売伝承にもある。美しい女性は皇統を保持し、「甚凶醜」の女性はその後物語を展開させ、『古事記』の世界を海という他界に広げて行く働きをもつことを述べた。第四章では崇神天皇条の祭祀伝承について論じた。三輪山伝承では大物主神と活玉依毘売の神婚を孝安天皇の御代と想定させ、四世の孫意富多泥古を神主とすることで神代から引き継がれた崇神朝の祭政の完成を語る。

第二節では『古事記』の文学性に触れた。垂仁天皇の後沙本毘売は同母の兄と夫である天皇との間で、どちらに味方するかを選択を迫られる。沙本毘売の葛藤は天皇への謀反の告白を契機に毅然とした態度に変貌する。沙本毘売の天皇への想いは漢籍の例を踏まえた喪失の悲しみを表す「哀情」である。天皇の後への想いは「愛」であり、愛する后さえ救えない天皇の苦悩が描かれる。兄に殉じることで旧体制を葬り去り、公を守ろうとする沙本毘売の太后像が形象されている。

第五章では、倭建伝承と大御葬歌を論じた。第三五番歌謡の「なづき田」の田と水、「稻幹」「旬ひ廻ろふ」の語が穀霊の死と再生が演じられる大嘗祭の祭式を連想させ、穀霊の体現者である天皇の死と再生を説く農耕祭式の死の要素が大御葬歌へと昇華したと考察した。第六章では、『古事記』に「殯宮」が記される唯一の伝承を取り上げた。仲哀天皇の遺骸は「殯宮」に安置され国之大祓が行われる。殯宮の記述は、「喪船」と関わる。品陀和気命の喪船による登場は、天照大御神の石屋戸隠りにおける復活再生のモチーフと重ね合わせて描かれて

いる。続く神との「易名」も成人した品陀和氣命が食国の政を行う資格を獲得し、「和氣」の名を名乗ってタラシ系から分離独立し、天つ日継の継承者として承認される過程を描いていると説いた。

第七章では「足母阿賀迦迹」という馬の足掻きを表す石之日売の特異な嫉妬の表現に着目した。石之日売は八田若郎女の入内を知り、御綱柏を投棄して出奔し、筒木での忌み隠りの後、豊楽の主催者として描かれ、太后として君臨する。『古事記』の石之日売は聖帝に相應しい成長を遂げる大后像を持つ点に特徴があると論じた。

第八章では軽太子と軽大郎女伝承の文学性について述べた。允恭天皇の子の世代の婚姻は内婚に向かう。同母兄妹の「奸」は起こるべくして起きた悲劇であるが、この世で結ばれることが許されない至高の存在として兄妹が描かれる。軽大郎女は歌謡物語で衣通王の名を付され、泣く女から決然とした意志・行動力を備えた美貌の女主人公に生まれ変わり、「奸」は至上の愛に昇華される。死と愛の普遍性が隠り国の泊瀬のイメージに重ねられ、兄妹相姦の禁忌は至上の

愛の完結のように語られる。第二節では若日下部王を取り上げた。仁徳皇女である王は赤猪子から「花蓮」と称えられる。朝日を浴びて花開く蓮は、日下の太陽信仰を名に負う若日下部王の比喩にふさわしい。赤猪子伝承では、雄略天皇と同様に王も時の支配を受けないかのようなのである。王は時間の流れを超越した「身のさかり人」として赤猪子と対照的に描かれる。王は新嘗祭の豊楽で天皇を「葉広五百箇真椿」に喩え、「高光る 日の御子」と称揚し、時空を超越した祭政王・大長谷若建命に相応しい太后として雄略天皇像を支えたと論じた。

第二部第一章では崇神紀の箸墓伝承を考察した。箸墓伝承は、神婚説話と古墳造宮起源説話が結びついたために、神と巫女を結ぶ「箸」がこの世と異郷を繋ぐ「端」「橋」「梯」の意に置き換えられ、百襲姫は箸に占められた死により、人の側から神の世界に生まれ変わったとした。第二章では『日本書紀』歌謡の文学性について述べた。第九四番歌謡では葬送の道行表現に鮪の妻問いと影媛の視点を重ね、鮪の死が歌垣の神送りと重ねて表現され、権力闘争に翻弄された影媛の悲哀を表出する。第九七番の春日皇女の歌謡は、勾大兄と皇女の聖婚

に『遊仙窟』の一夜の別れの切なさを重ねる。両歌謡は人間の愛と苦悩の遍歴や喪失の悲劇を語る。

第三部では『万葉集』の挽歌を取り上げて考察した。第一章は天武天皇挽歌を対象としたものであるが、巻二の一六二番歌に詠まれた「日の御子」思想には、他界が海の彼方の常世から天に昇華していく過渡的な様が窺えると論じ、また一六〇・一六一番歌には道教思想が踏まえられていることを確認した。第二章では柿本人麻呂の殯宮挽歌について述べた。挽歌には、皇子女の薨去が生前の居所から宮遷りをしたように語られる。生前の宮と殯宮の分離、殯宮と陵墓の觀念の接近など、死生観の変容、殯宮の形骸化などは『万葉集』の殯宮挽歌が詠まれた一つの要因であると考えられるが、火葬の導入など葬制の変革や都城の採用と歴代遷都の廃止を背景に、天皇家の思想的な抛り所が文学的な表現として残されたのではないかと論じた。

以上、本論文は、上代文学が日本独自の伝承基盤を保持しつつ、漢籍の受容を通し、五行思想・道教思想・儒教思想を取り込みながら新たな表現の世界を

模索しつつ、文学表現を獲得していった、その様相を論じたものである。

#### 論文審査の結果の要旨

鳥谷知子氏の申請論文『上代文学の伝承と表現』は、序章「上代文学の基層と表現」、第一部「古事記神話・説話」の表現（八章一八節）、第二部「説話と歌謡」（二章四節）、第三部「天武・持統朝の思想と表現」（二章五節）から成る。全六三八頁にも及ぶ大部の論であるが、全体の約七割を第一部が占めており、『古事記』の神話・説話の分析が本論文の中心を成している。第二部は、第一部で着目している『古事記』の文学性の問題を更に展開するものとして、『日本書紀』及び『日本霊異記』に見られる説話と歌との関係について論じている。そして第三部は、第一部を論じる上での前提をなす内容となっている。そこでまず第三部の内容から確認をする。

『古事記』の成立に関わる天武・持統朝の政治的状況、宗教・思想等の状況に

については、『日本書紀』に基づいて検討されなければならないが、『万葉集』に記載された天武・持統朝の歌もまた有効な資料となりうるものである。申請者はこの第三部において、天武・持統朝にみられる祭祀や思想、歌の表現等から『古事記』が編纂された時代背景を見ようとする。例えば『万葉集』の歌の分析や、『日本書紀』その他の文献調査を通して、穴師（三輪山北方）に祭られる神が風の神の性格を持ち、兵主（戦の神）や風伯雨師の信仰と結びつき（第三部第一章第一節）、この信仰が須佐之男命の性格に投影されていることを提起する（第一部第二章第一節）。また、持統天皇が天智天皇崩御後の「御齋会の夜」に詠んだ歌（『万葉集』巻二・一六二番歌）を検討し、この歌が日の御子思想が読み込まれた古い例であることに着目し、伊勢国と結びついた常世国信仰と皇祖神信仰が融合して、水平思想から垂直思想に移り変わる過渡期にあたる他界観念が見られることを指摘する。この論は、第一部において取り上げる皇祖神天照大御神を論じるものや、高天原・常世・海といった世界観を論じる諸論考へと繋がっていくものとなっている。第三部第二章第一節では大殿祭祀詞の成立

の背景について論じ、第二節では『万葉集』の殯宮挽歌について考察し、葬制や死生観の変化が、殯宮挽歌が成立する一因であったと説く。この視点は『古事記』の黄泉国神話や天若日子の葬儀の神話、また倭建命の大御葬歌の考察へと繋がっていく。

このように、天武・持統朝に営まれたと思われる様々な儀礼や祭祀を背景に持ちつつも、それ以前から伝わる信仰・思想を受け継ぎつつ、表現上の工夫を凝らされた上で『古事記』が成り立ってゆくと論者は捉えている。論文名の『上代文学の伝承と表現』というのは、上代文学の古層には諸々の思想・信仰・生活、儀礼・祭祀が存在し、その古層の上に文字表現の工夫・営みがあって『古事記』のような作品が成立するという見方によるものであり、そして研究する対象はあくまでも文学であるということを主張するタイトルとなっているものである。論者は特に明言はしていないが、古代における文字表現の、ある種の到達点に位置するものとして『古事記』を捉えているように読める。

第一部「古事記の神話・説話」、第一章第一節では「黄泉国」の神話を、第二

章第一節では須佐之男命を、第三章第一節では「玉」を取り上げて論じる。それぞれの異界、神、物が『古事記』の神話を展開させる鍵として位置付けられており、その神話展開の内容について論じている。第二章第二節「天照大御神と高御産巢日神―常世から高天原へ―」では、二神の原性格を探る中で、海の彼方の他界であった常世が高天原に昇格していく過程を論じている。この見方は本論全体の中での核のひとつとなっている。また、第四章第二節「沙本毘売伝承における心理表現と文学性」、第五章第一節「倭建伝承における文学性」、第八章第一節「軽太子と軽太郎女伝承」などでは、『古事記』の文学性を論じる。それぞれに夫婦・親子・兄妹の愛と苦悩の物語を、歌や会話文等を織り交ぜながら登場人物の心情を描き出し、滅び行くものの姿を描く手法に『古事記』の文学性を見出していく。第二部は、この文学性の問題を『日本書紀』や『日本霊異記』に広げ、特に歌をとまなう説話について、考察をしたものとして位置付けられる。この他、印象に残る論としては、第六章第二節と第七章第一節等がある。第六章第一節は、『古事記』中巻末尾に記された秋山春山の兄弟妻争い

の話の意義づけについて、この話は仁徳天皇（下巻最初の天皇）の聖帝としての登場を説くために中巻末に配されたという見解を示す。第七章第一節は、仁徳天皇の皇后である石之比売物語を取り上げ、『古事記』における石之比売は筒木宮に隠ることによって聖帝にふさわしい大后に成長を遂げていくことを論じ、『日本書紀』とは異なる『古事記』の独自性を説いている。

本論文の特徴は、研究史を網羅的に調査・援用し、漢籍からの影響と、加えて多く民俗学的な視点も取り入れて上代の神話・説話を検討しているところにある。それゆえ幾分独自性が弱まっている印象もあるが、その分堅実に論が展開されており、研究論文として破綻がない。そんな中で、既に紹介してきたような論者独自のこだわりや見解が盛り込まれている点が評価出来るところである。本論文は上代文献に記された神話・説話の文学性を追求したものであり、その文学性を支える表現の質、表現の工夫を考察したものである。背景に存在し、基盤となる伝承世界―この伝承世界をどう捉えるかが難しく、常に揺れ動きを伴うところではあるが―から、文字によって描き出される作品への飛躍の

跡を辿ろうとする試みであり、作品研究の今後の可能性を窺わせるものとして、研究史上に意義を有するものであると判断する。

よって、本論文の提出者烏谷知子氏は、博士（文学）の学位を授与される資格があるものと認められる。

平成二十九年九月三十日

主査	國學院大學准教授	谷口雅博	印
副査	國學院大學教授	豊島秀範	印
副査	國學院大學准教授	土佐秀里	印
副査	帝塚山学院大学教授	及川智早	印

烏谷 知子 学力確認の結果の要旨

左記四名が各専門分野からそれぞれ学力確認の試験を行った結果、本大学院の博士課程において所定の単位を修得した者と同等以上の学力を有することを確認した。

平成二十九年九月三十日

学力確認担当者

主 査	國學院大學准教授	谷 口 雅 博	Ⓔ
副 査	國學院大學教授	豊 島 秀 範	Ⓔ
副 査	國學院大學准教授	土 佐 秀 里	Ⓔ
副 査	帝塚山学院大学教授	及 川 智 早	Ⓔ